

# 陸佃の『禮象』について

——出土彝器收録の意圖——

原 田 信

## はじめに

文字は言葉を記録し、傳達する媒體である。だが、言葉に對する認識が一樣ではない以上、文字が傳達する情報の正確性には自ずから限度がある。これに對し、事物が直接視覚化された圖像は文字よりも認識の齟齬が少なく、情報のより正確な傳達ができる。兩者がともにあれば、情報はさらに正確で詳細なものとなる。

中國において、このような圖像の利點に早くに注目したのは南宋の鄭樵（一一〇四—一一六二）である。鄭樵はその著書『通志』に「圖譜略」の一篇を設けて圖譜（圖像や表）の實用性を主張し、古來より様々な分野で圖譜を利用した書物が著されたこと、そして、天文、地理、宮室、器用、車旗、衣裳、

壇兆（祭壇）、都邑、城築、田里、會計、法制、班爵（爵位や官位）、古今（歷代王朝の系譜）、名物、書（文字と音韻）の十六分野については、圖や譜がなければ成り立たないと述べている。これらの分野のうち、宮室、器用、車旗、衣裳、壇兆（祭壇）は、傳統的な學術の分類からいえば「禮」に深く關わるものである。「禮」は抽象的な概念であるとともに、祭器や建築、服飾といった諸々の器物をとまう各種の儀式として具現化された。このため、禮を解説する書物は、圖像と密接な關係にあつた。現在に傳わる最も古い禮の圖解本である五代後周から北宋初にかけての聶崇義『三禮圖集注』が、當時混亂していた祭器の規格の檢討と圖像の製作を命じた後周・世宗の勅命を發端として編纂されたことは、禮に關する書物と圖像の深い關係性をよく示している。<sup>(1)</sup>

本論で取り上げる北宋の陸佃（一〇四二～一一〇二）の『禮象』も圖像を利用した書物の一つで、禮に關わる器物や制度の圖解本（いわゆる禮圖）の一種である。北宋時に編纂された禮圖には、『禮象』のほかに、先に述べた聶崇義『三禮圖集注』と陳祥道（一〇五三～一〇九三）の『禮書』、そして『禮象』がある。このうち『禮象』は散佚しており、その全貌を窺うことはできないが、後で述べるように、禮圖として初めて出土彝器を收録したという點で注目し得る書物である。『禮象』が著された北宋の中・後期は、出土彝器への關心が高まると同時に、舊來より傳えられた祭器の形狀への疑問が深まり、それまでの認識が覆されようとしている時期であつた。では、この風潮の中で、陸佃は出土彝器にどのような關心のもとに『禮象』に收録したのか。

以下では、まず、既に散佚し現在ではあまり注目されることのない『禮象』がどのような書物であつたのかを明らかにした上で、陸佃が『禮象』に出土彝器を收録した意圖とその價值について検討する。

## 一 『禮象』の編纂とその特徴

『禮象』について、乾隆四十六年（一七八二）に完成した

陸佃の『禮象』について（原田）

『四庫全書』の陳祥道『禮書』提要には佚書と記されている。これより前、清の朱彝尊（一六二九～一七〇九）は『明詩綜』卷四十六・李開先の條で次のように記している。

先時、邊尙書華泉、劉太常西橋亦好收書。邊家失火、劉氏散佚無遺、獨中麓所儲百餘年無恙：聞中麓後人尙餘殘書數十部。巡撫丹徒張公物色之、中有陸司農『禮象』一編。張公歿後訪之、不能得矣。

（先時、邊尙書華泉、劉太常西橋も亦た書を收むることを好む。邊家は失火し、劉氏は散佚して遺る無く、獨り中麓の儲う所百餘年恙無し：聞くならく中麓の後人尙殘書數十部を餘す。巡撫の丹徒張公之を物色するに、中に陸司農の『禮象』一編有り。張公歿して後之を訪ぬも、得る能わず。）

李開先（號は中麓）の舊藏書から『禮象』を入手した「巡撫丹徒張公」とは、山東巡撫であつた張鵬（一六二七～一六八九）のことである。張鵬が『禮象』を入手したのを最後に、朱彝尊は同書を探したがついに見る事ができなかったと述べている。『禮象』はこの頃に散佚したようである。

だが、諸書に残された關聯の文章から、『禮象』がどのよう



な書物であつたかを推測することができる。まず、南宋の尤袤『遂書堂書目』や『朱子語類』の中では『禮象圖』と記されていることから、『禮象』が圖像を用いた書物であつたことは明らかである。<sup>(2)</sup> また、『禮象』編纂の意圖について、南宋・章汝愚『群書考索』が引く元祐六年（一〇九二）の『禮象』陸佃自序には、次のようにある。<sup>(3)</sup>

『禮記』、『詩』、『書』、『春秋』元爲殘缺、縉紳先生罕能言之。而學者抱殘缺不全之經、以求先王製作之方、可謂難也。余嘗本之性情、稽之度數、求讀經之大旨。自孟子始、以余之所能言與上之所可盡者爲十五卷、名曰『禮象』、以救舊圖之失。其度幾乎、非耶。

（『禮記』、『詩』、『書』、『春秋』は元より殘缺爲り、縉紳先生罕に能く之を言う。而るに學者は殘缺不全の經を抱き、以て先王製作の方を求む、難しと謂うべきなり。余嘗て之を性情に本づき、之を度數に稽え、讀經の主旨を求む。孟子自り始め、余の能く言う所と上の盡すべき所の者とを以て十五卷を爲し、名づけて『禮象』と曰い、以て舊圖の失を救う。其れ幾に庶きや、非なるや。）

この自序によれば、陸佃は『禮記』、『詩』、『書』、『春秋』

といった經書が不完全だと考え、道理に基づいてその大要を推測し、孟子を基點として『禮象』を編纂することとで「舊圖」の誤りを正したという。「舊圖」とは、五代末から宋初にかけて聶崇義が勅命により編纂した禮圖『三禮圖集注』のことである。同書は全國に頒布され、徽宗朝より前までは祭器を製作する上での基準であつた。<sup>(4)</sup> 『禮象』編纂の目的は、この『三禮圖集注』の誤りを正すことにあつたらしい。

また、南宋の陳振孫『直齋書錄解題』卷二は『禮象』の特徴を次のように記している。

以改舊圖之失。其尊・爵・彝・舟、皆取公卿家及秘府所藏古遺器。與聶圖大異。

（以て舊圖の失を改む。其の尊、爵、彝、舟は皆公卿の家及び秘府藏する所の古遺器を取る。聶圖と大いに異なれり。）

これによると『禮象』は尊や爵といった祭器について、當時收藏されていた出土彝器を参考し、『三禮圖集注』とは異なる圖を収録していた。先の陸佃自序と併せてみると、『禮象』は『三禮圖集注』の誤りを正すために編纂され、一部の祭器について出土彝器を収録した書物、ということになる。

陸佃は禮に精通した人物であった。『宋史』卷三四三の陸佃傳には儀禮制度に關する事柄が多く見えるほか、神宗が陸佃のことを「王(肅)、鄭(玄)自り以來、未だ佃の如き者有らず」と評したとある。また、陸佃の孫である陸游が著した『家事舊聞』には「楚公(陸佃)禮學に精し、毎に經に據り以て後世の妄を破る」と記されている<sup>⑤</sup>。

一方で、よく知られるように北宋の時に金石學が盛んになった。特に、北宋金石學の鼻祖といわれる劉敞(一〇一九～一〇六八)や歐陽修(一〇〇七～一〇七二)、蔡襄(一〇二二～一〇六七)、沈括(一〇三〇～一〇九四)といった人々は出土彝器を見聞して、斷片的ながらも『三禮圖集注』に誤謬のあることを指摘している<sup>⑥</sup>。このように金石學が盛んになり『三禮圖集注』への疑問が提起されはじめていた中で、禮學に長じた陸佃が『禮象』に出土彝器を收録したのは當然のことのように思われる。

だが、禮圖編纂の流れから見た場合、『禮象』はやや特異な本であった。北宋期に編纂された禮圖の代表的なものは、五代後周から北宋太祖にかけて編纂された聶崇義『三禮圖集注』と、元祐四年(一〇八九)頃に完成した陳祥道『禮書』、そして自序の年代より元祐六年(一〇九二)頃には完成していたと

陸佃の『禮象』について(原田)

考えられる『禮象』の三書である<sup>⑦</sup>。このうち『三禮圖集注』は禮に關する事物の基準を制定するために、漢から唐にかけて複數編纂された『三禮圖』を整理し、經書の本文と注疏に據つて『三禮圖』に注釋を施した。『禮書』は『三禮圖集注』の誤りを正し不足を補うため、さらに史書や諸子の記載を廣く涉獵して各事物を考證した。このように、兩書はともに、主に文獻に依據するものであつた。また、北宋以前の禮圖は散佚したが、『三禮圖集注』に残された歷代の『三禮圖』に關する記載を見る限り、出土彝器を利用した痕跡は見られない。つまり、『禮象』は出土彝器を收録した、最初の禮圖ということになる。

## 二 出土彝器收録の意圖

では、陸佃はなぜ『禮象』に出土彝器を收録しようとしたのだろうか。以下では、『禮象』の佚文から陸佃の意圖を検討してみよう。

筆者の調査したところでは、『禮象』の佚文は宋代の文獻に限つても南宋の章汝愚『群書考索』や王應麟『玉海』といった類書や鄭樵『通志』等に二十條餘りが傳わっている。このうち出土彝器を記したものは四條あり、「象尊」と「爵」に關



するものが各二條ある。

まず『玉海』に見える「象尊」の佚文には次のようにある。

『禮象』云、舊傳象尊畫象、或爲象載尊、或以其齒飾之、亦或空其腹爲尊。頃見古銅象尊、三足、象其鼻形。望而視之、眞象也。

（『禮象』に云く、舊く象尊は象を畫くと傳う。或いは象の尊を戴くと爲し、或いは其の齒を以て之を飾り、亦た或いは其の腹を空として尊と爲す。頃ごろ古の銅象尊を見るに、三足にて、其の鼻形を象る。望みて之を視るに、眞の象なりと。）

（『玉海』卷八十九・器用・唐象尊）

尊は酒を入れる祭器の一種である。佚文では、はじめに古くから傳わった「象尊」の形狀に關する諸説を擧げた上で、陸佃が見た「古銅の象尊」の形狀を記している。

ここでまず、陸佃の意圖を考える手がかりとして、佚文にある「象尊」の諸説が『禮象』以前の禮圖にどのように收録されたのかをまとめておこう。佚文は「象尊」について a 「尊に象を描いたもの」（畫象）、b 「象が尊を背負った形狀」（象載尊）、c 「象牙で飾った尊」（以其齒飾之）、d 「象形の尊で

中が空洞になったもの」（空其腹爲尊）という四つの説を擧げている。

これらのうち、a は後漢末期の阮湛『三禮圖』に見える説、b と d は三國時代の王肅が傳えた説である。<sup>(8)</sup> c 「象牙で飾った尊」は『禮象』以前に見えないが、これと似た「象骨で飾った尊」という説が後漢中期の鄭衆より傳わっており、後漢末期の鄭玄もこの説を踏襲している。<sup>(9)</sup> 『禮象』が誤りを正そうとした聶崇義『三禮圖集注』は阮湛の a 説と c に類似した鄭衆の説の兩説を收録した上で、「選びて之を用いんことを請う」と述べている。また、『禮象』と同時期に編纂された陳祥道『禮書』は上記の諸説をいずれも擧げた上で「未だ孰れが是なるかを知らず」と述べている。兩書とも諸説の正否を斷定することはできなかったようである。

では、陸佃は舊來の諸説と見聞した出土彝器の關係をどのように考えていたのだろうか。先に擧げた佚文ではこの點が不明確だが、『群書考索』に傳わるもう一つの佚文には次のようにある。

本朝陸佃云、舊傳象尊、或爲象載、或以其齒飾之、亦或空其腹以爲尊。蓋古者制尊、樣制不一。要之、同不失爲象

尊。頃見參知政事章惇得古銅象尊一、製作極精緻、三足、象其鼻。望而視之、眞象也。

(本朝陸佃云わく、舊く象尊は、或いは象載すを爲し、或いは其の齒を以て之を飾り、亦た或いは其の腹を空け以て尊と爲すと傳う。蓋し古者尊を制するに、様式は一ならざるか。之を要すれば、同に象尊爲るを失わざるなり。頃ごろ參知政事章惇古の銅象尊一を得るを見るに、製作は精緻を極め、三足、其の鼻を象る。望みて之を視れば、眞の象なりて。)

(『群書考索』前集・卷四十五・禮器門・樽罍類)

これは『玉海』の佚文とほぼ同じだが、途中に「蓋し古は尊を制するに様制一ならず。之を要すれば、同に象尊爲るを失わず」とある。つまり、『三禮圖集注』や『禮書』が舊來の諸説の正否を決めかねたのとは異なり、陸佃はいずれの説も「象尊」として誤ってはいないと考えた。そして、その上で自らが見聞した章惇(二〇三五―一一〇五)所藏の「古銅の象尊」に三本の足と鼻があり、本物の象のようだったと、その特徴を記している。どうやら陸佃が「古銅の象尊」を收録した意圖は、諸説の正否を論ずることではなく、自らが見た舊來の説とは異なる「象尊」の様子を記録することにあつたようである。

陸佃の『禮象』について(原田)

ある。

次に、『通志』中に傳わる「爵」の佚文について検討しよう。

陸佃禮象云、今秘閣及文彥博、李公麟家皆有古銅爵。有首、有尾、有柱、有足、有柄。祭統曰、尸酢夫人執柄、夫人授尸執足。先儒謂柄爲尾、蓋不見此制焉。

(陸佃禮象云わく、今秘閣及び文彥博、李公麟の家に皆古銅爵有り。首有り、尾有り、柱有り、足有り、柄有り。祭統に曰く、尸は夫人に酢<sup>むく</sup>いるに柄を執り、夫人は尸に授けるに足を執ると。先儒、柄は尾爲りと謂うは、蓋し此の制を見ざるなりと。)

(鄭樵『通志』卷四十七・器服略・尊彝爵觶之制)

この佚文で、陸佃は秘閣や文彥博(二〇〇六―一〇九七)、李公麟(二〇四九―一一〇六)が收藏していた「古銅爵」に首、尾、柱、足、柄があつたとし、續けて『禮記』祭統の「尸は夫人に酢いるに柄を執り、夫人は尸に授けるに足を執る」という一節を記している。これは「尸」(祖靈の憑代となつた人、主にその靈の子孫)とその家の夫人が互いに酒を勧める際の作法を述べたもので、『禮記』では尸が夫人に勧めるときは「柄」



を持つとされていた。そして、この後にある「柄」を「尾」と解釋する「先儒」の説とは『禮記』祭統の疏に見える孔穎達の説である。孔穎達の疏には次のようにある。

尸酢夫人執柄者、爵爲雀形、以尾爲柄。夫人獻尸、尸酢夫人、尸則執雀尾授夫人也。

(尸夫人に酢いるに柄を執るは、爵、雀形を爲し、尾を以て柄と爲す。夫人、尸に獻じ、尸、夫人に酢いらば、尸則ち雀尾を執りて夫人に授くなり。)

孔穎達は爵が雀の形をしていると認識していたので、『禮記』にある爵の「柄」を雀の「尾」の部分にあたと解釋した。爵の形狀については、『三禮圖集注』が後漢以來の『三禮圖』の説を援用して雀が碗を背負った形狀を圖示しており、『禮書』の圖も『三禮圖集注』を踏襲しているように、孔穎達より以前から陸佃の頃まで、傳統的に雀の形だと考えられたようである。

ところが、陸佃が見た爵は佚文にあるように「尾」と「柄」が別のものであった。そこで、實際に見た「古銅爵」の形狀と、「尾」と「柄」を同じものとした孔穎達の説との差異を指

摘したのである。但し、陸佃は孔穎達が「古銅爵」の形狀を見たことが無かったのだろうと述べるだけである。

このほか、『群書考索』にも「爵」に關する佚文が傳わっている。

陸佃禮象圖載古銅爵云、有首、有尾、有柱、有足、有柄。祭統曰、尸酢夫人執柄、是也。夫人授尸執足、是也。先儒謂柄爲尾、蓋不見此制。今文彥博、李公麟家有之、中有篆文、殆商器也。

(陸佃の禮象圖に古の銅爵を載せて云わく、首有り、尾有り、柱有り、足有り、柄有り。祭統曰く、尸、夫人に酢いるに柄を執るは是れなり。夫人、尸に授くるに足を執るは是れなり。先儒、柄を謂いて尾と爲すは、蓋し此の制を見ず。今、文彥博、李公麟家に之有り、中に篆文有り、殆ど商器なりと。)

(『群書考索』前集卷四十五禮器門 爵斚類)

この佚文の大部分は『通志』と同じだが、最後に「中に篆文有り、殆ど商の器なり」とある。これによれば、陸佃は舊來言われてきた爵と「古の銅爵」の形狀とを比較するだけではなく、銘文や年代といった出土彝器自體の特徴にも關心が

あつたように思われる。

前章で述べたように陸佃は祭器に關する舊來の説の集大成であつた『三禮圖集注』の誤りを正す目的で『禮象』を編纂したが、現在傳わる『禮象』の佚文を見る限りでは、陸佃は出土彝器によつて『三禮圖集注』の正否を明確には論じてはいない。しかし、陸佃が『三禮圖集注』とは異なつた形状の出土彝器を記録したことは、『三禮圖集注』で言われていた祭器を考證し、ひいてはその正否を判斷する新たな材料を讀者に提供するものであつたと言えよう。陸佃が『禮象』に出土彝器を收録した意圖は、自分自身が出土彝器を利用して『三禮圖集注』の正否を論ずることではなく、『三禮圖集注』にはなかつた出土彝器の造形や特徴に注意を拂い、圖像と記述によつて記録することにあつたと考えられる。

### 三 陸佃の考證と出土彝器記録の價值

陸佃より前の歐陽脩や蔡襄などは、出土彝器と舊來の説にある祭器との異同や矛盾を指摘している。また、陸佃が没して間もない徽宗時の上奏では『三禮圖集注』を名指して非難している<sup>(10)</sup>。陸佃が『禮象』を編纂した當時は、出土彝器と舊來の説の違いが次第に認識されていたのである。では、この

陸佃の『禮象』について（原田）

ような状況の中で、陸佃は何故に出土彝器を記録すること自体を目的としたのか。この點について、陸佃の考證の特徴から検討する。

陸佃の考證について、『文獻通考』等は、漢字の偏旁を分解し、聲符も義符も會意で解釋することを特徴とした王安石『字說』の影響を指摘している<sup>(11)</sup>。確かに、陸佃の祭器の考證には文字の形状や、それまでとは異なつた文字の解釋から自説を打ち立てたものが見られる<sup>(12)</sup>。これは確かに陸佃の特徴の一つではあつたが、出土彝器を記録したこととは關係がないようである。

ここで『禮象』の佚文中に見える「黃目尊」という祭器の考證に注目してみよう<sup>(13)</sup>。

陸佃云、舊圖黃目尊畫人目而黃之。人目不黃、作而黃之、理無有也。許慎說罍云、龜目酒尊。龜目黃、亦其氣之清明、未有知之者也。然則黃目宜畫龜目如慎說。

（陸佃云く、舊圖の黃目尊は人目を畫きて之を黃とす。人の目は黃ならず、作りて之を黃とすは、理に有る無きなり。許慎、罍を説きて云わく、龜目酒尊と。龜目黃たりて、亦た其の氣の清明たること、未だ之を知る者有らざるなり。然らば則ち黃目は宜しく



龜目を畫くこと慎の説くが如し。）

（『群書考索』卷四十五・禮器門・樽罍類）

後漢の鄭衆や鄭玄によると、「黃目尊」は黄金を用いて目の形の裝飾を施した尊であるという。<sup>(14)</sup> 陸佃は舊圖、即ち『三禮圖集注』に黄金色ではない人の目が尊に描かれている矛盾を指摘している。そして『說文解字』にある「龜目酒尊」の記載と、龜の目が黄金色であるという一般的事實によつて龜の目を描くよう主張した。つまり、陸佃は祭器を考證するにあつて、文獻の記載に加えて實際に見たものを考證の根據としたのである。

實際に見たものを考證の根據とすることは、この例だけに限らず、陸佃のもう一つの著作である字書の『埤雅』にも見える。陸宰（陸佃の子）の序によれば、『埤雅』は物の性質についての神宗の問いを發端として、陸佃がそれまで試みに記していた動植物の性質に關する著述を加筆訂正したもので、四十年をかけて完成させたという。<sup>(15)</sup> 同書について、『直齋書錄解題』卷三は「其於物性精詳。所援引甚博、而亦多用『字說』（其れ物性に於いて精詳たり。援引する所甚だ博し、而れども亦た多く『字說』を用う）」と王安石の『字說』の影響を指摘してい

る。だが、『直齋書錄解題』より前の『郡齋讀書志』卷四はその特徴を「書載蟲魚鳥獸草木名物、喜采俗說。然佃王安石客也。而其學不專主王氏、亦似特立者（書は蟲魚鳥獸草木の名物を載し、俗說を採るを喜ぶ。然らば佃は王安石の客なり。而れども其の學専ら王氏のみを主とはせず、亦た特立する者なり）」と概括している。

『郡齋讀書志』が「俗說を採るを喜ぶ」といい、「其の學専ら王氏のみを主とはせず、亦た特立する者なり」と指摘するように、『埤雅』は『字說』とは關係のない、物にまつわる見聞を多く記している。例えば「鱧」について、次のように記している。

今玄鱧是也。諸魚之中唯此魚膽甘可食、有舌、鱗細、有花紋、一名文魚。與蛇通氣、其首戴星、夜則北響、蓋北方之魚也。

（今の玄鱧、是れなり。諸魚の中、唯だ此の魚は膽甘く食すべし、舌有り、鱗細やかにして、花紋有り、一に文魚と名づく。蛇と氣を通じ、其の首は星を戴き、夜は則ち北響す、蓋し北方の魚なり。）

陸佃は「鱧」を解釋するのに、これが當時の何という魚に

該当するか、その通稱や味、形状の特徴、異稱のほか、傳説にいたるまで採録している。陸宰の序によると、陸佃の取材は文獻のみならず、農夫や牧夫、工匠など様々な人々から廣く聞き取り、風聞は必ず自ら試した上で記録したという<sup>16</sup>。つまり、陸佃は文獻に限らない廣い取材と、それによつて知り得た情報を考證に取り入れることを重視したのである。

陸佃の考證は文獻の引用や文字の解釋だけに限らず、自ら見た事實を援用した。『禮象』が諸家に收藏されていた出土彝器を圖示し、その特徴を記録することを意圖した背景にも、このような陸佃の考證の特徴があつたと考えられる。

以上のように、陸佃は實際に見たものを重視し、當時收藏されていた出土彝器を禮圖である『禮象』に記録した。だが、同様に出土彝器の形状を圖示し、大小、銘文までを詳細に記した呂大臨『考古圖』が『禮象』とほぼ同時期の元祐七年（一一〇九）に完成しているほか、この頃には、陸佃の推薦によつて中書門下後省の刪定官となり、古器物の鑑定と收藏で知られた李公麟が『考古圖』を編纂している<sup>17</sup>。また、やや後の大觀年間（一一一〇—一一一五）の初めには、李公麟『考古圖』をもとにして徽宗勅選の『宣和博古圖』が編纂された<sup>18</sup>。ところが、これらの出土彝器を詳細かつ専門に記録した書物が存

在するにもかかわらず、『禮象』が利用された記述が諸書に見する。まず、南宋時に編纂された『中興禮書』卷五十九・吉禮には次のようにある。

又考『禮象』銅爵之制、有首・有尾・有柱・有足・有柄、正得右制。兼昨來政和年間、已曾依此改正鑄造、緣渡江之後、類皆散失。

（又『禮象』の銅爵の制を考うるに、首有り、尾有り、柱有り、足有り、柄有り、正に右の制を得。兼ねて昨來の政和年間、已に曾て此に依りて改正鑄造するも、江を渡るの後に緣り、類ね皆散失す。）

この記述によると、徽宗の政和年間（一一一三—一一一五）に『禮象』に依據して爵を鑄造したという。實際の祭器製造に當たつて『禮象』が収録した出土彝器の形状が利用されたのである。また、鄭樵は『通志』・「器服略」の冒頭で、

臣舊嘗觀釋奠之儀、而見祭器焉。可以觀翫、可以說義。而不可以適用也。

（臣舊嘗て釋奠之の儀を觀て、祭器を見る。以て觀翫すべし、以



て義を説くべし。而れども以て適用すべからざるなり。）

と、釋奠の儀式で用いられた祭器が實用に適しないことを述べた上で、續けて古代の祭器が實用に適した形であつたことを示す例として本論で既に検討した『禮象』の尊や爵の記載を引いている。このほかにも、南宋の陳思『寶刻叢編』卷一は、

先儒不達理於尊彝、則妄造不適用之器……應知先儒之說多虛文也。近陸氏所作『禮象』庶可幾於古乎。其於禮圖固有間矣。

（先儒理を尊彝に達せず、則ち妄りに用に適さざるの器を造る……應に先儒の説に虚文多きを知るべきなり。近ごろ陸氏作る所の『禮象』、幾古に庶きや。其の禮圖に於けるや固より間有り。）

と、舊來の説にある祭器が實用に適しないことから誤りだと考え、その根據として『禮象』を擧げている。では、これらはなぜ出土彝器の詳細な形状を記した『考古圖』等の圖ではなく『禮象』に依據したのか。

そもそも出土彝器は古代の祭器であり、禮とは密接な關係にあつた。しかし、出土彝器の記録は、必ずしも禮への觀點

から記録されたわけではない。呂大臨が『考古圖』の序文に「當天下無事時好事者蓄之、徒爲耳目奇異玩好之具而已（天下無事の時に當たりて好事の者之を蓄えるも、徒に耳目奇異玩好の具と爲すのみ）」と記しているように、當時の出土彝器に對する關心や収集の背景には出土彝器を愛玩の對象とする風潮があつた。呂大臨はこの風潮を批判した上で、「以意逆志、探其制作之原、以補經傳之闕亡、正諸儒之誤謬（意を以て志を逆え、其の制作の原を探れば、以て經傳の闕亡を補い、諸儒の誤謬を正さん）」と述べ、出土彝器の形状が經書の不足を補い、舊來の諸説の誤りを正す意義のあるものだと言っている。呂大臨の言う「經傳」には禮が含まれるだろうが、『考古圖』はあくまで出土彝器を集成することを目的として編纂された書物であつて、禮への觀點から出土彝器を記録したものではなかつた。また、この後に出土彝器を愛玩する風潮が次第に強まる中で編纂された『宣和博古圖』は、徽宗の收藏品を集成したもので、『考古圖』と同じく禮への觀點から出土彝器を記録したものではなかつた。<sup>19)</sup>

これに對し、『禮象』は『三禮圖集注』の後を受けて編纂された書物であり、その目的は儀禮制度に用いる祭器と、それにまつわる様々な説を考證することにあつた。『禮象』はこの

ような禮の領域の中に出土彝器を記録した書物なのである。『禮象』における出土彝器の記録はそれまで禮への觀點から記録されることのなかった出土彝器を、禮圖という禮の範疇に屬する書物に記録し、圖示することで、初めて出土彝器を禮の體系の中に位置づけようとする試みだったと考えられる。そして、先に挙げた例で『考古圖』等の圖ではなく『禮象』が利用されたのは、『禮象』において禮の體系に位置づけられた出土彝器の記録が、單なる出土彝器の記録よりも、禮の祭器を論じる上で参照するに足る根據があるものとみなされたからであろう。

## 注

- (1) 『宋史』卷四三一・聶崇義傳に「先是世宗以郊廟祭器止由有司相承製造、年代浸久、無所規式、乃命崇義檢討摹畫以聞」とあるのによる。
- (2) 『朱子語類』卷八十九、九十の二箇所に『禮象圖』とある。
- (3) 南宋の王應麟『玉海』卷五十六も陸佃序の一部を引くが、ここには「元祐七年三月序」とある。陸佃序の成立年に關する記載は『群書考索』と『玉海』にしか見えず、どちらが正しいかを斷ずることはできない。
- (4) 『三禮圖集注』編纂の経緯と、完成後全國に頒布されたこと

陸佃の『禮象』について（原田）

は『宋史』聶崇義傳等に見える。また、『續資治通鑑長編』卷二〇六の治平二年（一〇六五）の條にある李育の奏上には建隆四年（九六三）に執り行われた祭祀で宋の太祖が着用した衣服が『三禮圖集注』に基づいたものであったことが見えるほか、宋祁『景文集』卷二十六の「論太樂署有春牘之名而無春牘之器」には宋祁が樂器の形狀を考證するに當たつて『三禮圖集注』を參考にしたこと等、『三禮圖集注』が參考されたことは史書に散見する。徽宗朝なると大觀年間（一一一〇七―一一一〇）に上奏された慕容彦逢（一〇六七―一一一七）の「理會三禮圖札子」（『歷代名臣奏議』卷一百二十）が『三禮圖集注』の改定を進言しているほか、『三禮圖集注』を廢し『政和五禮新義』を基準とするよう求めた賈安宅（一一〇八―？）の奏議『玉海』卷五十六）が見える。

(5) 『宋史』には陸佃の事績として、陸佃が大喪の時に着用する「襲滾」に關する神宗の問いに答えて詳定郊廟禮文官となつたこと、哲宗の時に太廟の祭祀に用いる祭器について正したこと、徽宗の時に大裘の匣を黄金で飾るという建議に反對したことなどが見える。

(6) 劉敞、歐陽脩、蔡襄などの指摘については『集古錄』卷一の「古煮簋」に見える。「古煮簋」について劉敞は「簋容四升。其形外方内圓而小。壻之似龜，有首、有尾、有足、有甲、有腹。今禮家作簋亦外方内圓而其形如桶，但于其盖刻为龜形」と述べている。ここでは「禮家」としか記されていないが、内容が『三禮圖集注』と同一であることから、その批判は『三禮圖集



## 中國文學研究 第三十六期

注』に向けられたものとしてよい。歐陽脩と蔡襄は劉敞を支持し、特に蔡襄は「禮家傳其說、不見其形制、故名存實亡。原甫（劉敞）所見、可以正其謬也」と禮說の誤りを明確に指摘している。また、沈括の論については『夢溪筆談』卷十九の「黃彝」に「禮書所載黃彝、乃畫人目爲飾、謂之黃目。餘游關中、得古銅黃彝、殊不然。……或曰禮圖樽彝、皆以木爲之、未聞用銅者。此亦未可質、如今人得古銅樽者極多、安得言無。……禮圖悉作草稼之象。今世人發古塚得蒲壁、乃刻文蓬蓬如蒲花數時、穀壁如粟粒耳。則禮圖亦未可爲據」と見える。

(7) 『群書考索』卷三十一・禮書類には北宋の代表的な禮書が列擧されている。このうち禮圖は『三禮圖集注』と『禮書』、『禮象』、そして王洙『周禮禮器圖』がある。但し『周禮禮器圖』は『周禮』に限った圖であり、他の三書が禮を總合した圖であるのとは異なる。

(8) 阮誼のa説は『詩』魯頌・駟之什「閼宮」の孔穎達疏に「阮誼禮圖云、犧尊飾以牛、象尊飾以象、於尊腹之上、畫爲牛象之形」とあり、『春秋左傳』定公十年の孔穎達疏や『三禮圖集注』にも同様の記載が見える。王肅の説のうち、bは、aに挙げた『詩』や『春秋』と同部分の孔穎達疏に見え、『詩』の孔穎達疏には「王肅云：大和中、魯郡於地中得齊大夫子尾送女器。有犧尊、以犧牛爲尊。然則象尊、尊爲象形也。王肅此言以二尊形如牛象而背上負尊」とある。dは『禮記』明堂位の孔穎達疏に「王（肅）注禮器云、爲犧牛及象之形、鑿其背以爲尊」とある。なお、現在傳わる『禮記』禮器にこの記載は見えない。

(9) 鄭衆のc説は『周禮』春官・司尊彝の鄭玄注に見える。また、鄭玄自身は『禮記』明堂位の「尊は犧、象を用う」という部分の注の中で鄭衆の説を援用している。

(10) 劉敞などの指摘については注六を、徽宗以後の非難については注四を参照。徽宗の大觀年間に『三禮圖集注』について上奏した慕容彦逢は同書の改定を述べたのみだが、その後と同じく上奏した賈安宅は『三禮圖集注』を「諸儒の臆説」と明確に非難している。

(11) 陸佃が『字説』の影響を受けたと指摘するものには、『文獻通考』卷一八一・陸佃『禮記新義』の條が引用する『中興藝文志』や、『四庫全書總目提要』卷一五四の陸佃『陶山集』提要などがある。また、『字説』の理論については、王安石『臨川文集』卷八四「熙寧字説」に「文者、奇偶剛柔、雜比以相承、如天地之文、故謂之文。字者始於一二、而生生至於無窮、如母之字子、故謂之字。其聲之抑揚開塞、合散出入、其形之衡從曲直、邪正上下、内外左右、皆有義、皆本於自然、非人私智所能爲也。與夫伏羲八卦、文王六十四、異用而同制、相待而成易」とある。

(12) 『四庫全書總目提要』卷一五四の陸佃『陶山集』提要は、神宗の元祐年間（一〇八六―一〇九四）に皇帝が祭祀の際に着用する衣服について禮部員外郎の何洵と陸佃との間で議論された「元祐大裘議」の一節「至謂褐襲之襲從龍、龍衣爲襲」をあげて『字説』の影響を指摘している。また、『玉海』卷八十七・器用に見える佚文「先是聖祖用四圭有邸。禮象曰、謂之邸、以

託宿取名。圭邸璧、則以青圭插蒼璧、璋邸琮、則以赤璋插黃琮」は、從來『爾雅』などで「邸」は「本」であるとされていた解釋に對し「託宿」と解釋して新説を立てている。

- (13) この佚文は出典を明示していないが、『玉海』卷八十九・器用に『禮象』の佚文として「禮象曰、龜目黃、黃目宜畫龜目、且龜亦因以爲戒」と類似したものがあり、『禮象』の佚文と見てよい。

- (14) 鄭衆の説は『禮記』明堂位の孔穎達疏の中に見え、鄭玄の説は『周禮』司尊彝の鄭玄注に見える。

- (15) 『埤雅』陸宰序に「元豐間、預修說文、因進書獲對、神考縱言至于物性、先公敷奏承旨、德音稱善、且恨古未有著爲書者。先公又奏、臣嘗試爲之、未成、未敢進也。天意欣然、便欲見之。因進說魚、說木二篇。自是益加筆削、號物性門類……埤雅比之物性門類、蓋愈精詳、文亦簡要。先公作此書、自初迨終、僅四十年」とあるのによる。

- (16) 『埤雅』陸宰序には「此書自初迨終、僅四十年。不獨博極羣書、而農父牧夫、百工技藝、下至輿臺阜隸、莫不諏詢。苟有所聞、必加試驗、然後紀錄、則其深微淵懿、宜窮天下之理矣」とある。

- (17) 『宋史』卷四四四の李公麟傳による。

- (18) 『宣和殿博古圖』の編纂について、北宋の蔡條『鐵圍山叢談』卷四には「公麟字伯時、實善畫、性希古、則又取平生所得暨其聞睹者、作爲圖狀、說其所以、而名之曰『考古圖』、傳流至元符間。太上皇帝卽位、憲章古始、眇然追唐虞之思、因大宗尙。

陸佃の『禮象』について（原田）

及大觀初、乃效公麟之『考古』、作『宣和殿博古圖』とある。

- (19) 徽宗が出土彝器を愛玩、收集したことについては蔡條『鐵圍山叢談』卷四に「太上皇帝卽位……及大觀初、乃效公麟之『考古』、作『宣和殿博古圖』。凡所藏者、爲大小禮器、則已五百有幾。世既知其所以貴愛、故有得一器、其直爲錢數十萬、後動至百萬不翅者。於是天下冢墓、破伐殆盡矣。獨政和間爲最盛、尙方所貯至六千餘數、百器遂盡」とある。